

# 月刊 やちまなこ

2013.8.15 発行

No. 189

## 8 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



7月17日、釧路市出身の作家、桜木紫乃さんが直木賞を受賞した。受賞作品は「ホテルローヤル」で、当時釧路湿原近くにあったホテルを舞台にした内容をテレビや新聞で報じていた。

しばらくしてホテルの名前はともかく、この近くの道路沿いにあった看板を当時（約8年前だと思ふ）撮影した記憶がよみがえり、早速調べてみると雪の残る湿原を背景に立つ「HOTELローヤル」と書かれた看板だった。

春とはいえ、霧のかかる肌寒い日だったようで、釧路湿原の撮影を終えて帰る途中の風景をランダムに撮った中のワンカットのようだ。

釧路市郊外の荒涼たる湿原にあるオブジェのようにも見たので残りのフィルムを使い切るため、何気なくシャッターを切ったのだろう。

ホテルは既になくなり、いつの間にか消えた「HOTELローヤル」の看板は時代の証として、何時までも写真の中で凜と立ち続けている。

# コッタロ川と湿原のほとりから

## 158 8月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住. 中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

残暑御見舞を申し上げます。

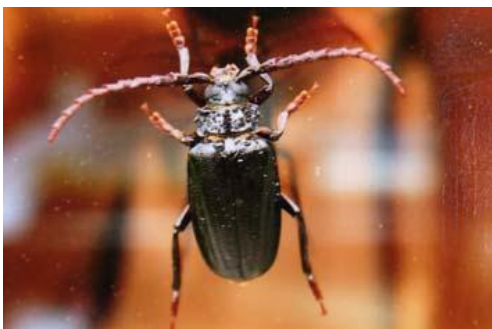
山も畑も大いなる豊作に恵まれて、胡桃の林では枝もたわわに垂れ下がった一つ一つの房に 13~15ヶの実がぎっしり、エゾリスやシマリス達を手招きし乍ら熟れ落ちようとしているではありませんか。そこで“秋立つや房ごと垂れしクルミ哉”。又、ここでは二~三年に一度の当たり年となったハリエンジュとハシドイの樹にも芳香を放つ白い花が咲いて結実したのも嬉しい現象です。畑では去年



掘り忘れたゴボウが草丈 150 cmに伸びて四方に枝分かれした先に花穂をつけ薊によく似た赤紫色を呈しており、受粉作業に忙しい丸花蜂をとまらせております。この愛らしい蜂は、カボチャの花付けも請け負っていて夜は♀花の中で眠るのです。全身黄色い花粉にまみれてぐっすり眠っているのを早朝見かけると、そのままそおとしておきますの(ウフフフ)。



一方、水辺で今季大発生した蛍が次々に羽化してきて、7月9日から灯り始めほぼ一月余り光り続けているのも珍しく、しとしと降りの断続的なエゾ梅雨もどきに気をよくしたのかも知れませんね。熱中症には無縁のコッタロはまた別の逆に背筋が寒くなる出来事に遭遇しました。日課の散歩と見廻りコースである川や湿原は移住 19年目に入った8月1日迄何の変哲もなく、輪禍死と思われるエゾ鹿♀1頭が川の中に転がっていても全く恐ろしくもありません。ところが11日間カラス1羽にさえ気付かれなかった骸が8月3日朝に消えていたのです。100kg余りの巨体を移動させた獣と云えばエゾヒグマにほかなりませんので2人して川岸から引きずり揚げたであろう痕跡を調べると、ありました！さらに草木をなぎ倒して湿原上流部へと運ぶ途上に水溜まりがあって、大きなクマの足跡3つに、たっぷり泥水が入っていたではありませんか。2人共その証跡を確認したことであらためてゾゾゾーッ。ここはクマの通り道と云われてはいたのですが要注意です。それにしても夜陰にまぎれての餌運びで熊太郎も困ったろう？なんて問うてみるわけにもまいりませんしね。



さて、その湿原で暮らす丹頂の第2コツ&タロの幼鳥(18羽目)がそろそろ飛べそうな見事に広げた翼に風を受けて、今日、明日にも大空目がけ舞い上がるのではないのでしょうか。早くも吹き初めた秋風に促されて昆虫達(クワガタ、カミキリ、コガネ虫等々)もうっかり丹頂の目前を飛んだばっかりにパクリ！と食べられてしまう昨今、幸運にも窓ガラスに張りついたままじっと動かずにいたノコギリカミキリは命拾いしたのでパチリ。左右対称に各々10ヶの鋸切歯をもつこの虫のなんてシンメトリックな生体美をかもし出していることでしょう。

## 湿原の住人たち その149

## ツリガネニンジン

湿原周辺の道路沿いや丘陵地に秋の気配を感じさせるツリガネニンジンの花が咲いています。リング状に並んだ小さな薄紫色の花と花が風に揺れるとベルの音が聞こえてきそうです。和名は花が釣鐘形で根が太くチョウセンニンジンに似ていることからついたそうです。下向きの花には、ハナバチや蝶が蜜を目当てにやってきて受粉の手伝いをしています。ある人が「花をのぞいたらポテチの匂いがした！」とっていました。みなさんが試したら、どんなふうを感じるのでしょうか。



## 夏休みの作品が完成しました！

### 7/20「体験講座 擦文土器を作ろう（標茶町郷土館共催）」

昨年は縄文土器を作りましたが、今回は擦文土器を作りました。擦文時代は本州では平安時代にあたり、この頃の土器の文様は刷毛で擦ったような文様が特徴です。と郷土館学芸員の坪岡さんから教わりながら、各自粘土を輪積みしながら器を作りました。少し乾いた土器の表面を木の枝や貝殻などを使い様々な文様をつけてオリジナル擦文土器が完成しました。



8/6「葉脈のしおりを作ろう」 葉の裏にスタンプを付けて拓本のように台紙に押す方法と、重そうで煮た葉を歯ブラシでたたいて葉肉をとり、標本を作ってラミネーターでパウチする二つの方法でしおりを作りました。 標本作りは、葉の隅々まではりめぐらされた葉脈が見えるように、大人も子供も根気よく丁寧に作業を続け、キタコブシ、イタヤカエデ、ミズナラなどのしおりを完成させました。

## ネムネムの達古武うろろ日記 Vol.44「達古武沼は出会いの場？」

休みに達古武沼まで行ってきました。早起きしてちょっと朝の散歩のつもりが、立ち寄ったセンターハウスでは久しぶりに会う人もいて、つい午前中いっぱい遊んでしまいました。

私の達古武沼との出会いは10年前、自然再生事業における調査でした。「お前に『仕事』というものを見せてやろう。」当時の職場のボスにいわれ、プランクトンから魚、昆虫、水草、鳥と様々な研究者が達古武沼に集結し、徹底的に調査をする『プロジェクト』というものを目の当たりにしました。

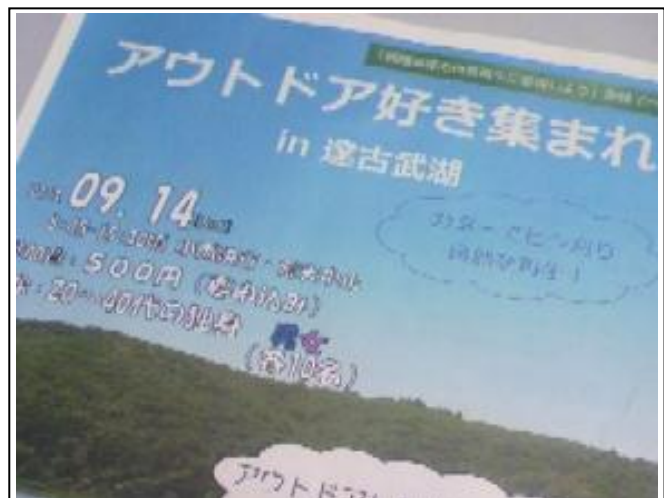
私はあの仕事を通じて様々な研究・行政機関、コンサルタント会社、地元の方と知り合いになり、それが今の仕事の強力なバックになっています。達古武沼は私にとってまさに『出会いの場』でした。

その達古武沼で再生事業に参加しながら独身者向けの『出会いの場』を作るイベント（合コン?）があるそうです。「どう?」といわれましたが、無理!!仕事以外での会話は哀しいくらい苦手です。以前「夕飯でも。」と女友達に誘われていたら、いわゆる合コンの人数あわせで。初対面の男性に「大変なお仕事なんですよ。」といわれたので、タンチョウが肥溜めにはまったと早朝に連絡が入った話をして、ドン引きされました・・・。

辻 ねむ (標茶町郷土館学芸員)

8がつ5にち

ばしょ たっこぶぬま



環境省、斬新なアイデアというか、なかなか思い切ったことしますね・・・。

